

梶井基次郎

Kの昇天



K の 昇 天

—
ある
いは
K
の
溺
死

お手紙によりますと、あなたはK君の溺死^{できし}について、それが過失だったろうか、自殺だったろうか、自殺ならば、それが何に原因しているのだろう、あるいは不治の病をはかなんで死んだのではなからうかと様ざまに思い悩^{なや}んでいられるようでもあります。そしてわずか一と月ほどの間に、あの療養地^{りょうようち}のN海岸^{くうぜん}で偶然にも、K君と相識^{あいし}ったというような、一面識もない私にお手紙をくださるようになったのだと思います。私はあなたのお手紙では

じめてK君の彼地かのちでの溺死を知ったのです。私は大層おどろきました。と同時に「K君はとうとう月世界へ行つた」と思つたのです。どうして私がそんな奇異きいなことを思つたか、それを私は今ここでお話ししようと思つています。それはあるいはK君の死の謎なぞを解く一つの鍵かぎであるかも知れないと思うからです。

それはいつ頃ごろだったか、私がNへ行つてはじめての満月の晩です。私は病氣せいの故でその頃夜がどうしても眠れねむないのでした。その晩もとうとう寢床ねどこを起きてしまひまして、幸い月夜でもあり、旅館を出て、錯落さくらくとした松樹しょうじゆ

の影かげを踏ふみながら砂浜すなはまへ出て行きました。引きあげられた漁船ぎよせんや、地引網じびきあみを捲まく轆轤ろくろなどが白い砂あざに鮮あざかな影をおとしているほか、浜には何の人影もありませんでした。干潮あらで荒なみい浪なみが月光くたに砕くだけながらどうどうと打ち寄せていました。私は煙草たばこをつけながら漁船のともこしに腰こしを下して海なを眺ながめていました。夜はもうかなり更ふけていました。しばらくして私が眼なを砂浜なの方に転まじましましたとき、私は砂浜なに私以外なのもう一人の人を発見みしました。それがK君なだったので。しかしその時はK君なという人を私はまだ知りませんでした。その晩、それから、はじめて私

達は互^{たが}いに名乗り合つたのですから。

私は折りおりその人影を見返りました。そのうちに私はだんだん奇異の念を起してゆきました。というのは、その人影——K君——は私と三四十歩も距^{へだた}つていたでしようか、海を見るというのでもなく、全く私に背を向けて、砂浜を前に進んだり、後に退いたり、と思うと立留つたり、そんなことばかりしていたのです。私はその人がなにか落し物でも捜^{さが}しているのだらうかと思ひました。首は砂の上を視凝^{みつ}めているらしく、前に傾^{かたむ}いていたのですから。しかしそれにしては躓^{かが}むこともしない、

足で砂を分けて見ることもしない。満月で随ずいぶん分ぶん明めいるいの
ですけれど、火を点つけて見る様子もない。

私は海を見ては合間合間に、その人影に注意し出しました。奇異の念は増ますます募つってゆきました。そしてついには、その人影が一度もこちらを見返らず、全く私に背を向けて動作しているのを幸い、じっとそれを見続けはじめました。不思議な戦せん慄りつが私を通り抜けました。その人影のなにか魅つかれているような様子が私に感じたのです。私は海の方に向き直って口笛くちぶえを吹ふきはじめました。それがはじめは無意識にだったのですが、あるいは人影

になにかの効果を及ぼすかもしれないと思うようになり、それは意識的になりました。私ははじめシューベルトの「海辺にて」を吹きました。御存じでしょうが、それはハイネの詩に作曲したもので、私の好きな歌の一つなのです。それからやはりハイネの詩の「ドツペルゲンゲル」。これは「二重人格」と云うのでしょうか。これも私の好きな歌なのでした。口笛を吹きながら、私の心は落ちついて来ました。やはり落し物だ、と思いました。そう思うより外、その奇異な人影の動作を、どう想像することができましょう。そして私は思いました。あの人

は煙草を喫^のまないから燐^{マツチ}寸がないのだ。それは私が持っている。とにかくなにか非常に大切なものを落としたのだらう。私は燐寸を手に持ちました。そしてその人影の方へ歩きはじめました。その人影に私の口笛は何の効果もなかったのです。相変わらず、進んだり、退いたり、立留ったり、の動作を続けているのです。近寄ってゆく私の足音にも気がつかないようでした。ふと私はビクツとしました。あの人は影を踏んでいる。もし落し物なら影を背にしてこちらを向いて捜すはずだ

天心をややに外れた月が私の歩いて行く砂の上にも一

尺ほどの影を作っていました。私はきつとなにかだとは思いましたが、やはり人影の方へ歩いてゆきました。そして二三間げん手前で、思い切って、

「何か落とし物をなさったのですか」

とかなり大きい声で呼びかけてみました。手の燐寸を示すようにして。

「落とし物でしたら燐寸がありますよ」

次にはそう言うつもりだったのです。しかし落とし物ではなさそうだと悟さとった以上、この言葉はその人影に話しかける私の手段に過ぎませんでした。

最初の言葉でその人は私の方を振り向きました。「のっぺらぼー」そんなことを不知不識しらずしらずの間に思っていました。たので、それは私にとって非常に怖ろしい瞬間しゅんかんでした。

月光がその人の高い鼻を滑すべりました。私はその人の深い瞳ひとみを見ました。と、その顔は、なにか極きままり悪る気げな貌かおに変わってゆきました。

「なんでもないんです」

澄すんだ声でした。そして微笑びしょうがその口のあたりに漾ただよいました。

私とK君とが口を利きいたのは、こんなふうな奇異な事

件がそのはじまりでした。そして私達はその夜から親しい間柄あいだからになったのです。

しばらくして私達は再び私の腰こしかけていた漁船のともへ返りました。そして、

「ほんとうに一体何をしていたんです」

というようなことから、K君はぼつぼつそのことを説き明かしてくれました。でも、はじめの間はなにか躊躇ちゆうちよしていたようですけれど。

K君は自分の影を見ていた、と申しました。そしてそれは阿片あへんのごときものだ、と申しました。

あなたにもそれが突飛とっぴでありましようように、それは私にも実に突飛とっぴでした。

夜光虫が美しく光る海を前にして、K君はその不思議な謂いわれをぼちぼち話してくれました。

影ほど不思議なものはないとK君は言いました。君もやってみれば、必ず経験するだろう。影をじーっと視凝みつめておると、そのなかにだんだん生物の相があらわれて来る。外ほかでもない自分自身の姿なのだが。それは電燈の光線のようなものでは駄目だめだ。月の光が一番いい。なぜということとは云わないが、——という訳は、自分は自分

の経験でそう信じるようになったので、あるいは私自身にしかそうであるのに過ぎないかもしれない。またそれが客観的に最上であるにしたところで、どんな根拠こんぎよでそうなのか、それは非常に深遠なことと思います。どうして人間の頭でそんなことがわかるものですか。——これがK君の口調でしたね。何よりもK君は自分の感じに頼たより、その感じの由よって来たる所を説明のできない神秘のなかに置いていました。

ところで、月光による自分の影を視凝めているとそのなかに生物の気配があらわれて来る。それは月光が平行

光線であるため、砂に写った影が、自分の形と等しいと
いうことがあるが、しかしそんなことはわかり切った話
だ。その影も短いのがいい。一尺二尺くらいのがいいと
思う。そして静止している方が精神が統一されていていいが、
影は少し揺れ動く方がいいのだ。自分が行ったり戻った
り立留ったりしていたのはそのためだ。雑穀屋が小豆の
屑を盆の上で捜すように、影を揺ってごらんさい。そ
してそれをじーっと視凝めていると、そのうちに自分の
姿がだんだん見えて来るのです。そうです、それは「気
配」の域を越えて「見えるもの」の領分へ入って来るの

です。——こうK君は申しました。そして、

「先刻あなたはシューベルトの『ドツペルゲンゲル』を口笛で吹いてはいなかったですか」

「ええ。吹いていましたよ」

と私は答えました。やはり聞こえてはいたのだ、と私は思いました。

「影と『ドツペルゲンゲル』。私はこの二つに、月夜になれば憑つかれるんですよ。この世のものでないというような、そんなものを見たときの感じ。——その感じになじんでいると、現実の世界が全く身に合わなく思われて

来るのです。だから昼間は阿片喫煙者きつえんしゃのようけんたいに倦怠です」
とK君は云いました。

自分の姿が見えて来る。不思議はそればかりではない。
だんだん姿があらわれて来るにしたがって、影の自分は
彼自身の人格を持ちはじめ、それにつれてこちらの自分
はだんだん気持が杳はるかになって、ある瞬間から月へ向か
って、スースーツと昇のぼって行く。それは気持で何物とも
云えませんが、まあ魂たましいとでも云うのでしよう。それが
月から射さし下ろして来る光線を溯さかのぼって、それはなんと
も云えぬ気持で、昇しょうてん天してゆくのです。

K君はここを話すとき、その瞳はじつと私の瞳に魅ひとみり非常に緊張きんちようした様子でした。そしてそこで何かを思いついたように、微笑でもってその緊張を弛ゆるめました。「シラノが月へ行く方法を並ならべたてるところがありますね。これはその今一つの方法ですよ。でも、ジュール・ラフォルグの詩にあるように

哀あわれなる哉かな、イカルスが幾いくにん人も
来ては落っこちる。

私も何遍なんべんやってもおっこちるんですよ」

そう云ってK君は笑いました。

その奇異な初対面の夜から、私達は毎日訪ね合ったり、
一緒いっしょに散歩したりするようになりました。月が欠けるに
したがって、K君もあんな夜更よふけに海へ出ることはなくなりました。

ある朝、私は日の出を見に海辺に立っていたことがあり
ました。そのときK君も早起したのか、同じくやつ
て来ました。そして、ちょうど太陽の光の反射のなかへ漕こ

ぎ入った船を見たとき、

「あの逆光線の船は完全に影絵じゃありませんか」

と突然私に反問しました。K君の心では、その船の実体が、逆に影絵のように見えるのが、影が実体に見えることの逆説的な証明になると思ったのでしよう。

「熱心ですね」

と私が云ったら、K君は笑っていました。

K君はまた、朝海の真向から昇る太陽の光で作ったののぼだという、等身のシルウエットを幾枚か持っていました。

そしてこんなことを話しました。

「私が高等学校の寄宿舎にいたとき、よその部屋でしたが、一人美少年がいましたね、それが机に向かっている姿を誰が描いたのか、部屋の壁へ、電燈で写したシルウエットですね。その上を墨でなすって描いてあるのです。それがとてもヴィヴィッドでしてね、私はよくその部屋へ行つたものです」

そんなことまで話すK君でした。聞きただしてはみなかったのですが、あるいはそれがはじまりかもしれませぬね。

私があなたのお手紙で、K君の溺死を読んだとき、最

も先に私の心象に浮かんだのは、あの最初の夜の、奇異なK君の後姿でした。そして私はすぐ、

「K君は月へ登ってしまったのだ」

と感じました。そしてK君の死体が浜辺に打ちあげられてあった、その前日は、まちがいもなく満月ではありませんか。私はただいま本暦ほんれきを開いてそれを確かめたのです。

私がK君と一緒にいました一と月ほどの間、その外にこれと云って自殺される原因になるようなものを、私は感じませんでした。でも、その一と月ほどの間に私がや

や健康を取戻し、とりもとどこちらへ帰る決心ができるようになってたのに反し、K君の病気は徐々じよじよに進んでいたように思われます。K君の瞳はだんだん深く澄すんで来、頬ほおはだんだんこけ、あの高い鼻柱が目に立って硬かたく秀ひいでて参ったように覚えています。

K君は、影は阿片のごときものだ、と云っていました。もし私の直感が正鵠せいこくを射抜いぬいていましたら、影がK君を奪うばったのです。しかし私はその直感を固執こしゆうするのでありません。私自身にとってもその直感は参考にしか過ぎないのです。ほんとうの死因、それは私にとっても五里霧中ごりむちゆう

であります。

しかし私はその直感を土台にして、その不幸な満月の夜のことを仮に組み立ててみようと思います。

その夜の月齡げつれいは十五・二であります。月の出が六時三十分。十一時四十七分が月の南中する時刻と本曆には記載きざいされています。私はK君が海へ歩み入ったのはこの時刻の前後ではないかと思うのです。私がはじめてK君の後姿を、あの満月の夜に砂浜に見出したのもほぼ南中の時刻だったのですから。そしてもう一步想像を進める

ならば、月が少し西へ傾きはじめた頃と思います。もしそうとすればK君のいわゆる一尺ないし二尺の影は北側といつてもやや東に偏へんした方向に落ちる訳で、K君はその影を追いながら海岸線を斜ななめに海へ歩み入ったことになります。

K君は病と共に精神が鋭すどどく尖とがり、その夜は影がほんとうに「見えるもの」になったのだと思われます。肩かたが現われ、頸くびが顕あらわれ、微かすかな眩暈めまいのごときものを覚えると共に、「気配」のなかからついに頭が見えはじめ、そしてある瞬間が過ぎて、K君の魂は月光の流れに逆らい

ながら、徐々に月の方へ登ってゆきます。K君の身体はだんだん意識の支配を失い、無意識な歩みは一步一步海へ近づいて行くのです。影の方の彼はついに一箇いっこの人格を持ちました。K君の魂はなお高く昇天してゆきます。そしてその形骸けいがいは影の彼に導かれつつ、機械人形のように海へ歩み入ったのではないでしょう。次いで干潮時の高い浪なみがK君を海中へ仆たおします。もしそのとき形骸に感覚よみがえが蘇よみがえってくれば、魂はそれと共に元へ帰ったのであります。

哀れなる哉、イカルスが幾人も

来ては落っこちる。

K君はそれを墜落と呼んでいました。もし今度も墜落であつたなら、泳ぎの出来るK君です。溺れることはなかつたはずですよ。

K君の身体は仆れると共に沖へ運ばれました。感覚はまだ蘇りません。次の浪が浜辺へ引摺りあげました。感覚はまだ帰りません。また沖へ引去られ、また浜辺へ叩きつけられました。しかも魂は月の方へ昇天してゆくのだ

です。

ついに肉体は無感覚で終わりました。干潮は十一時五十分と記載されています。その時刻の激浪げきろうに形骸けいがいの翻弄ほんろうを委ねゆだねたまま、K君の魂は月へ月へ、飛翔ひしょうし去ったのであります。

日本文学電子図書館

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

日本文学電子図書館